

験ホール内での全体配置計画(ゾーニング)が必要である。しかしながら、実験ホールの完成予定の日時とビームライン建設の時期とのタイミングが必ずしも整合していない。共同チーム内での議論の結果、生物系利用ビームライン、硬X線利用ビームラインおよび軟X線利用ビームラインと大別して、平成9年度末までにビームラインの設置が可能であるホール部分に配置することとした。ビームラインを設計する上で、ビームラインと遮蔽壁との関係など物理的な情報が不可欠であるので、上記の4本の共同利用ビームライン建設チームには連絡されることとなろう。

4. シンポジウムなど

第三世代の放射光光源としてのSPring-8の特徴を生かした利用研究を共同チームとして立ち上げるために、「イメージング」に関する国際ワークショップが開催される。当初、来年3月22-24日に神戸国際交流会館で開かれる事となっていたが、阪神大震災のために開催地を急遽理化学研究所(和光)に変更した。このワークショップは、国内外の15名のスピーカーを予定しているが、半「非公開」の形式で行われる。現在利用者懇談会のサブグループなどを中心に案内が行われている。

その他の研究会としては、昨年1月に第一回のワークショップが開かれたSPring-8、ESRF、APS三極協力研究の第二回ワークショップがAPSにおいて5月8、9日に行われる。



かくしてSPring-8第4回IACは・・・

SPring-8 共同チーム

斎藤 茂和

1月17日(火)

その地震が兵庫県南部を襲った時、12名のSPring-8国際アドバイザー会議(IAC)委員のうち、国外委員8名は関西国際空港に向かう機上に4名、その前日までに来日していた委員は筑波、神戸、姫路にそれぞれ1名、また本国を出国する前の委員が1名という状況であった。国内委員は座長を含めて4名、筑波と東京にそれぞれ2名ずつおられた。第1回：東京、第2回：姫路、第3回：播磨と年々会場を西に、またプログラムも加速器開発から放射光利用研究/ビームライン開発へと内容移しながら毎年開催してきたIACの第4回は、兵庫県西播磨で1月18日～20日の3日間開催することになっていた。

昨年11月までに利用系(ビームライン開発担当)グループを除くSPring-8のスタッフは播磨に集結していたので、朝から情報収集に努めつつ、当初の予定通りには開催できないまでも、プログラムを圧縮・変更して何とかIACを開催できないものかと善後策の検討が進められた。関係者の無事の確認、委員及びSPring-8利用系スタッフ(原研・東海と理研・和光)の播磨への移動方法、帰国ルートの確保などである。

していたこともあって、混乱なく予定どおり17日夕刻には播磨に到着できることが分かった。また、神戸におられたため最も心配された中国IHEPの委員も間もなく無事が確認された。関空に9時過ぎに到着した英国SRS、独国HASYLAB/DESY、仏国ESRFの3委員と、昼に到着した米国APSの委員には順次電話がつながったので、とにかく関空の対岸にわたりホテルを確保してもらいたいとの連絡もついた。

中止もやむを得ないのではないかと意見も出始めるなか、昼過ぎ、筑波におられた座長から、米国NSLSの委員を伴い、鳥取経由で播磨に向かうとの連絡が入り、にわかに開催の方向が見えて来た。3連休を利用して大阪の自宅に帰っていたSPring-8のシニアスタッフとも連絡が取れたので、その時までに関空対岸、和泉佐野市のホテルに向かうとの連絡が入っていた4委員のもとに行き、連絡体制を確保してもらいたいとの指示も出された。夕刻になって何とかホテルに合流した同スタッフからは、日本語を解さないため被害の状況が分からない委員達は、既に相談のうえ明朝6時に車で播磨へ向かえば午前9時から開催されるIACに間に合うということで意見の一致を見ているとの連絡が入った。

座長は来られる、委員は全く中止を考えていないというこれらの状況がIACの開催を決定的なものにした。それまでの間に大阪から播磨への交通手段を検討していたので、伊丹→高松の空路と高松→播磨の陸路が最も確実であろうということになり、直ちに往復便の予約と空港への出迎え準備が行われ、その旨和泉佐野市のホテルにも連絡が取られた。同時に、東海と和光にも18日中に何とか播磨へ来るようにとの指示が出され、利用系のスタッフ8名が羽田→米子→岡山経由で播磨へ来られることになった。

この日、夜の時点で全12名のIAC委員は、欠席が確認された国内委員3名、既に播磨入りした委員1名、座長を含め18日中に来播の見通しが立った委員6名、依然として本国出発前の露国INPの委員1名、そして神戸から移動できずにいる委員が1名という状況であった。

1月18日(水)

朝9時過ぎ、陸路高松空港へ委員を出迎えに行くグループが播磨を出発した。伊丹発臨時便の出発が遅れたこともあって、4名の委員が播磨に着いたのは午後6時前であった。その少し前までに、鳥取で1泊した座長と1名の委員、米子→岡山経由の利用系スタッフがIAC会場の兵庫県先端科学技術支援センターに到着しており、また神戸にいた委員からも姫路経由で夜には播磨に来られるとの朗報も入った。しかし、露国の委員は出国手続きの遅れから19日昼前に成田到着との連絡が入り、IACへの参加はあきらめざるを得ないことになった。

かくして第4回IACは当初の予定より遅れること9時間半、座長を含め参加委員7名で18日の午後6時30分から始まった。この日のプログラムはSPring-8の概況状況と前回のIACで指摘された技術的事項への回答の2つ、約1時間のセッションのみであったが、翌日は計画どおり、利用系の進捗状況について丸1日検討することが確認された。被災者を思えば和やかなレセプションなどできない道理であるが、それでも慣例に従い、委員の歓迎会が行われ、その最中に神戸から8人目の委員が到着した。

一方、各委員に対して帰国を1日延ばせないかという意向打診が、この機会を利用して

行われた。この時点で、委員の帰国を当初の予定どおりIAC終了日の翌21日とすれば、不安定な交通事情を考えると、20日中には委員を播磨→高松→伊丹→関空付近のホテルに移動させなければならない。このルートは既に予約済みであったが、これをA案とし、別にこの日の日中にB案の予約が行われていた。B案は21日：播磨→高松→羽田、22日：成田出発という内容のもので、もし委員に帰国を1日延ばしていただければ、当初予定していたプログラムのほとんどが消化できるのである。

1月19日(木)、20日(金)

IACはSPring-8スタッフからの報告を受け、質疑応答を通じて内容を吟味する通常セッションと、委員だけで討議する特別セッションとから構成されている。

19日朝からIACの通常セッションが開催される中、SPring-8スタッフによって昨晚各委員からご快諾いただいたB案を実行するため、国内便・国際便・ホテルの予約変更・確認、キャンセル、引率者の指名などが慌ただしく行われた。一方、IAC委員の方も昼前の特別セッションで、当初は省かざるを得ないと考えていた加速器系の進捗状況の検討評価を20日午前中に行い、建設状況を視察したうえで例年どおりIACレポートのドラフティングを行うことが確認されていた。

このようにしてプログラムの入れ替えはあったものの、予定していた検討事項のほとんどがIACによる吟味の対象となった。

1月21日(土)

瞬く間に4日間が過ぎIACは前日の夜閉会した。東海、和光から来播した利用系スタッフの大部分は昨晚までに高松から帰京しており、この日の朝には引率を引き受けた数名のスタッフが7名の委員と共にマイクロバスで高松空港へ向かった。明日には別のスタッフが残る1名の委員を広島空港まで送り届けることになっている。

会議の結果は第4回IACレポートとして記録に残される。しかし、予期せぬ大災害の中、科学と技術の役割を信じる委員の熱意とそれを受けとめたIAC事務局の努力、そしてSPring-8スタッフのチームワークが明日のために必要な、今出来る最大限のことをすることによって、SPring-8計画を更に一步前進させたという記録も残しておくべきと思う。それは会議の期間中、何の役にもたてなかった者の義務とも考えている。

今、播磨にはSPring-8の加速器系スタッフと事務系スタッフがいる。利用系スタッフの全部が播磨に結集し、SPring-8の全スタッフが揃うのは、計画どおりであれば今年秋の予定である。来年の第5回IACでは加速器のコミッションングを主題に検討が行われ、それを最終回としてその後は主として利用研究を対象とする会合が新たに組織されることになるだろう。SPring-8計画は、いつでも、その時点からの着実な歩みの蓄積である。それは必ず来るのだから、未来は明るくしなければならない。IAC期間中に集められた義援金は来週被災地に送られる。

(平成7年1月21日)